

ロングランインタビュー 物語を動かすエンジンは「片思い」

森見登美彦がついに京都を飛び出した！ 森見氏いうところの「第10子」。

つまり10冊目となる最新刊『ペンギン・ハイウェイ』の主人公は郊外に住む小学4年生の少年。

新境地に挑んだ胸中と、その跳躍を可能にした創作方法論に迫る。

『ペンギン・ハイウェイ』から森見ワールドの第2章がはじまる

もしかしたら森見登美彦という作家を本当はよくわかっていなかったのかも知れない。京都在住で京都を舞台にした小説を書く作家、思わずひきこまれる文体の魅力、そうした認識はお歳暮にハムをくれたから(ハムの人)というくらいの、うかうかとしたものに過ぎなかったのではないかな。思わず反省してしまったのは最新作『ペンギン・7 ハイウェイ』がこの作家の第2章の幕開けを告げるようなみずみずしい魅力をたたえていたからだ。

「デビュー作の『太陽の塔』から見たら『ペンギン・ハイウェイ』はもう、全然違うところにいると思うんですよ。『太陽の塔』を書いた時には腐れ大学生しかかけないイメージだったし、自分でもそう思っていた。だからすごい変わってきてるはずなんです。変わってきてるんだけど、でも自分の中にまったくなかったものかと言うと、『太陽の塔』を書いた時から『ペンギン・ハイウェイ』を書くような素養や性質はたぶん自分の中に明らかにあって、それがわかりやすく外に出ていなかったんだと思う。きっと深くまで掘っていくとおおもとは変わっていない。ただその使い方、料理の仕方がだんだんとわかってきたということかなという気がして」

『ペンギン・ハイウェイ』の舞台は京都ではない。郊外の住宅地である。ある日忽然と現れたペンギンの謎を追って、小学4年生のアオヤマ君の冒険が始まる。

「そもそもなんでペンギンなの？って話ですよ。別に理屈じゃなくて直感ですけど、ペンギンって遠目に見たらプラスチックで出来てるみたいな嘘くささがある。南極にいても違和感がありますからね。こいつらはこんなところで何してんのやろうと。どこにいても違和感のあるヘンな生き物で」

ちなみに〈ペンギン・ハイウェイ〉とはペンギンが海からあがってくる道のことを指す。よちよち歩いているその道のどこが一体〈ハイウェイ〉やねん！と思わず突っ込みたくなる言葉である。

「そうそう。そう思いますよね。なんだそれはと(笑)。〈ハイウェイ〉も人工的な感しかする言葉だし、道かずっと彼方まで延びている感しかする。ここから未知の何かにつながってるんじゃないか。そういう感覚が僕は好きなんです。〈ペンギン・ハイウェイ〉という言葉を知ったから、これを書いたような気がしません」

物語のアイデアの大半は言葉からやってくる

そうしたキーワードから物語が立ち上がってくることは珍しくないらしい。

「わりと僕はそうなんです。たとえばタイトルって一番大きいキーワードじゃないですか。『四畳半神話大系』(以下、『四畳半』)にしても〈四畳半〉というスケールが小さいものの象徴に〈神話大系〉というおおげさでカッコイイ言葉を無理やり結びつけた。並行世界を書こうというのと無限に四畳半があるというイメージはあったんですが、あのタイトルを思いついたことで、四畳半から壮大なものへ繋がるふうにしたいと、後付けでつくっていったんです。あの時はとにかく派手なタイトルじゃないとダメだと思ったんです。実

は『太陽の塔』はあまりタイトルは気に入ってなくて、でもあれは結局あれしかつけようかなかったので、次はもっとこう、ハッキリでいかなければいかんと思った。四畳半でうじうじしてる男の話なのに、それをそのまま哀愁漂うタイトルにしたら誰も読んでくれない。だからまずタイトルありきで、それにあわせて物語を書くみたいな」

（四畳半）なのに〈神話〉になってほしい。接続部に生じる不思議な違和感が森見ワールドへと通じる扉なのかもしれない、

「(こういう言葉の組み合わせが好き) みたいな感覚はあんまり説明ができない部分ですけど、でも何かしら僕の選択眼というか基準があって、それを寄せ集めていくと僕っぽい世界になっていくというか。すごいちっぽけなもの、むさくるしいもの、当たり前のをそのままじゃなくて、宇宙とか神話とかスケールの大きいものとくっつけようとするところがありますよね」

『夜は短し歩けよ乙女』（以下、『夜は短し』）もやはりタイトルありきだった。

「友達の彼女が歩くのが好きな人で、京都の市内だったら、普通にバスで行けばいいところを延々歩くという話を聞いてて、それを歩きながらふっと思い出したんです。それで〈歩けよ乙女〉というのを思いついて、〈歩けよ乙女〉というのはいいなあ、〈命短し恋せよ乙女〉だから〈歩けよ乙女〉は何か短かったらいいんだろ？そこで『夜は短し歩けよ乙女』だと。これはもう、女の子が一晩ぐるぐる歩き回る話だろう、じゃあどう歩くんだろうという感じで作っていったんです」

アイデアの大半はそんな風に言葉からやってくるらしい。

『夜は短し』に出てくる〈葦駄天コタツ〉とか〈パンツ番長〉もそうで、コタツなのに葦駄天？って思うじゃないですか。読んでる人が見ただけで“えっ？”となるような言葉を思いつくと嬉しい。そういう言葉を思いついて、そこから膨らませていくというパターンは僕の中ではかなりスタンダードなやり方なんです」

これまでの方法論で物語を書き始めたはじまりの場所へ

『夜は短し』の装丁を見た時、自分でもおおっと思ったんですよ。ただ、ちょっとはずかしかったんです。それまで『太陽の塔』『四畳半』『きつねのはなし』ってかわいらしいイメージがまったくなかったの、こんなかわいらしい装丁を与えられるにたる男なんだろうかと（笑）。でもそうやって次の本が出ると、前の本の印象もその並びで見ると変わっていくし、自分でも前に出した小説の意味がわかるような気がするんです。自分がなんで『太陽の塔』や『四畳半』みたいな小説を書けたのかっていうのを考えた上で、もういっぺんその方法論でやり直すところから始めたのが『ペンキン・ハイウェイ』でした。」

では舞台を郊外にしたのはなぜだったのか。実は主人公のアオヤマ君と同じ年頃に、森身少年も郊外の住宅地に住んでいたという。

「9歳のときに家族で奈良県の郊外に引越したんです」

奈良と言っても大阪のベッドタウンだったその町は住宅街とはいえ、まだ森や空き地も残っていて、お父さんとよく探検したらしい。京都と同じく、郊外は森見さんがよく知っている場所なのだ。アオヤマ君は日々の発見をノートに記録しているけれど、森見少年が原稿用紙に物語を書き始めたのもその頃のことだ。

小説家として原点に再び立ち返ろうとしたこの人は、かつて自分自身がものを書き始めたはじまりの場所を舞台に選んだ。

アオヤマ君はまだ海を見たことがない。人は死んだらどうなるのだろう。宇宙はどうなってるんだろう。それは日常がまだ知らない大きな謎につながっていたあの頃感覚こそが森見ワールドの原点だったからに違いない。

そして『ペンキン・ハイウェイ』はアオヤマ君の初恋の話でもある。彼にとって忽然と現れるペンギンに

匹敵する謎は歯科医院のお姉さんなのだ。

「なぜ片思いばかりを描くのか？なんでしょうね。主人公がちゃんと動くからじゃないですかね。放っておくと僕の主人公っていうのはうじうじ悩んで目的を見失いがちなんで（笑）。ただ実際のところ、主人公がくつつかくつつかないかはそんなに大事ではない。『夜は短し』でも最後になるまで別にくっつけなくてもいいかと思っていたくらいなので。片思いはお話を動かすエンジンみたいなものなんですよ。主人公の目的さえ決まってしまうと、最後にくっついてくつつかなくても、途中はどんなふうにも話を膨らませられるから片思いを書くんだと思います」

目的が決まらなると途中を楽しめない。それは何も小説に限った話ではないというから、面白い。

「僕は趣味らしい趣味ってなくて、せいぜい散歩ぐらいなんですけど、あてもなく散歩するっていうのがすごい苦手で、たとえば近所の本屋さんに行くとか何かしら目的がないと、もう家から出ないんです（笑い）。でもたとえば職場から家に帰る時って、最終的には家に帰るって目的があるので、すごい散歩しやすい。これは家に帰るための道中なんだと。その途中で変わったものを見たり、いつもと違う道を通ったりするのはすごく楽しい。たぶん〈自由〉が苦手なんじゃないでしょうか。」

ついに最強のヒロイン登場？ 次回作は森見版『竹取物語』

さて、今冬には本誌で『異邦の姫君』（仮）の連載を予告している。ベースは『竹取物語』。エッセイ『美女と竹林』を書いたほどの人である。これは期待せずにはいられない。

「まあ子供のころから竹が好きでしたからね。竹については少しは知っていますよ。ミキサーにかけて分解したくらいですから」

なんでまた竹をミキサーに？

「大学院で竹からたんぱく質を取り出す研究をしていたので。そういう経験のある人はさすがにあまりいないでしょう。子どもの頃は当たり前前に読んでましたけど、『竹取物語』というのも異様な話ですよ。よくもまあ、こんな時代にこんなへんてこな話ができたと。しかも自分が竹に対して抱いているイメージとぴったり重なるんですよ。確かに竹ってペンギンと同じで、ほかの物とは違う生き物という感じがある。竹林は竹が占拠してほかの植物が生えないから、中に入るとへんにひっそりした感じがあるんです。昔の人もそれでここはほかの森や林とは違うって感じがしたのではないか。たぶんそれで月と結びつけたんだと思うんですけど、その発想の仕方がまるっきり僕の感覚と同じだなあと思って」

<以下、省略>

～この文章は、

「生駒検定<全国版><問22>の解答・解説 <http://ikomakentei.seesaa.net/article/446774508.html?1486523422>）

に掲載されているものです。～